

2023 年度日本語教育学会秋季大会 大会若手優秀発表賞（口頭発表） 受賞コメント

石垣尚子（横浜国立大学大学院生）

この度は、名誉ある賞をいただき大変光栄に存じます。まだ実感もわからず、信じられない思いではありますが、時間が経つにつれて喜びがこみあげてきています。

これまでを振り返りますと、幼児教育の現場に携わり外国人幼児の担任となる中で自分自身の戸惑いがあり、渡米を経て帰国後、日本語教師となり、異文化理解の大切さ、幼児の第二言語習得について興味を持ち、これまでとは違った視点で、幼児教育現場での日本語支援について考えるようになったことなどがあります。そのような経験が本研究への取り組みに繋がりました。

本研究では、幼稚園で入り込み支援を行いながら観察し、発達の最近接領域を考慮したダイナミック・アセスメントを用いて、調査協力児の状況だけでなく、自分自身が行った支援が適切であったのかを、詳細に、時間をかけて、そして園の先生方と情報交換しながら評価することに繋がりました。そのような評価により、日本語習得と園適応が同時に深まっていく様子、習得した言葉の意味が、協力児の興味・関心、体験とともに、広がっていく様子がわかりました（この主観的な言葉の意味の広がりここでは「概念の広まり」と述べました）。幼児の印象の中で結びついた一連の要素があいまいに広がっていく過程は、その後の思考の発達の要因としての大きな意義をもつとヴィゴツキー（2001）は述べています。一人の調査協力児の、日々の小さな変化は、当たり前のことであるかもしれませんが、第二言語である日本語を聞いての理解から能動的な発話へつなげ、概念の広まりが観察された場面では、同時に外国人幼児自身の日本語を話したいという強い思いも感じられました。一方で、日本語が未熟なために遊びに入れずいたり、発話のカテゴリーの少なさから（習得済みの表現のみの多用）相手の同意を確認できず、強い性格の印象を与えたりしている様子もありました。このような状況から、外国人幼児の本来の良さを出していけるような、現場の先生方の助けとなるような日本語支援の足場かけが必要であると感じています。

最後に、これまでご指導いただき、いつも励ましていただいた橋本ゆかり先生、幅広い学びを提供していただいた横浜国立大学大学院の先生方に感謝致します。そして山形で声をかけていただいた先生方にも感謝の気持ちをお伝えしたいです。初めての口頭発表で（会場もすばらしすぎて）とても緊張しましたが、先生方の温かいお声かけで励まされたり、コメントを頂いたりしたことで、その後も一人で考え自問するきっかけとなりました。もしこのような機会がなかったら、自分の研究にここまで向き合うことはなかったと思います。そして、今回のこの受賞は全く想像しておらず、本当に驚きましたが、ずっと悩み続けた自分を勇気づけてくれるものでもありました。今後も幼児の日本語支援、観察を行いながら研究を続け、いつか縦断的調査による第二言語習得過程、概念形成過程の様子などを追究し、幼児教育現場の助けとなる支援を提案していきたいと思えます。

*任意で、動画による受賞コメントもお寄せいただきました。[こちら](#)から視聴が可能です。



2023 年度日本語教育学会秋季大会

大会若手優秀発表賞（ポスター発表） 受賞コメント

氏名 松本美香子（早稲田大学大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような名誉ある賞を頂戴し、驚愕すると同時に、大変、光栄に存じます。何よりも、まず調査協力者であるローザ氏（仮名）に謝意を表したいと思います。今回の受賞により、ローザ氏の語りが広くお伝えできたことをとても嬉しく思います。

本発表は、日本で暮らす外国人の日常生活での宗教行為と日本語の意味づけに焦点を当てたものです。本調査協力者であるローザ氏は、東日本大震災の被災経験のあるカトリック外国人信徒です。また、発表者である私もカトリック信者です。本調査では、2023年3月に2回（計180分）、オンラインで半構造化インタビューを実施しました。本インタビューは対話的構築主義によるライフストーリーを採用しました。そして、両者の対話を私が省察し、ローザ氏の内的世界を記述しました。ローザ氏の語りから、ローザ氏にとっての日本語の意味づけが変化していったことが分かりました。ローザ氏にとって日本語は、最初、家庭での抑圧装置であったところから、ボランティア教師との関わりを通して自己表現の手段となり、他の日本で暮らす外国人を支援し、仲介する道具となっていきました。長期にわたって日本で暮らすローザ氏は、心身の死の危機を経験しました。そのローザ氏の存在を支えていたのは、家庭や教会での祈りを通した神への語りかけでした。ローザ氏は、祈りを通じて、神との個人的な関わりを持ち、内的世界を恒常的に保持していました。そのため、心身の危機に直面した際には、絶望からの回避を図り、生きる勇気を得ていました。このように、ローザ氏の語りから、宗教的側面を持つ内的世界は、日本で暮らす外国人が生きる上で、生の質に影響を及ぼす重要な価値を持つことが認められました。

昨今、日本で暮らす外国人の高齢化も進んでおります。これらの方々が終末を迎えるまで充足した生を送るために、宗教的な内的世界に対する研究が必要ではないかと思い、本研究の着想を得ました。しかし、発表に向けて準備するにあたり、心を開いて語ってくださったローザ氏の信頼に報いて、きちんと伝えられるのかと葛藤がありました。また、発表にいらしてくださる方にも、中には日本で暮らす外国人の宗教的側面に触れてこなかった方々もいらっしゃることを想定し、どうすればわかりやすくお伝えできるのかと悩みました。研究者として、まだまだ未熟ではありますが、今回の発表に至る過程、また当日の議論の中で多くの学びを得ることができました。このような機会をくださった大会の先生方、発表をご覧くださり、ご意見・ご質問をくださった皆様に心より感謝申し上げます。また、研究指導をしてくださった先生方、励ましてくれた研究仲間、支えてくれた家族に、溢れんばかりの感謝を表したいと思います。

今後も、日本で暮らす外国人の充足した生を支え、ひいては、多様な背景を持つ人々と共に生きる社会を推進していく上で理解の基盤となるような研究に励む所存です。改めて、この度はどうもありがとうございました。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



[2023 年度日本語教育学会秋季大会（山形テルサ，2023. 9. 26）口頭発表⑭]

外国人幼児に向けた概念形成のための日本語支援

—ダイナミック・アセスメントを援用した分析—

石垣尚子

本稿では、外国人幼児の在籍する幼稚園にて参与観察を実施、対象児の日本語の未熟さが原因で遊びや園活動の経験が狭まることのない様支援を実施した。「生活的概念」「科学的概念」の理論（ヴィゴツキー，2001）を基に、諸活動の中で体験的な言語使用を重要視し、「発達最近接領域」を考慮したダイナミック・アセスメントを援用して分析した。結果は①一斉指導における理解、②語彙の拡充、③遊びの体験、④友達との関わり、⑤概念の広まりという5つの支援のタイプが観察された。概念の広まりについては、①一斉指導における理解→②語彙の拡充→⑤概念の広まりと繋がる様子が見られ、調査協力児の興味・関心と共に、活動の幅が広がった。園生活における日本語支援においては、これらパターンの意識と、様々な場面のつながりを考慮した支援が必要であることが分かった。

（石垣一横浜国立大学大学院生）

[2023 年度日本語教育学会秋季大会（山形テルサ，2023. 9. 26）ポスター発表⑳]

移住地における外国人信徒の内的世界と日本語の意味付け

—東日本大震災被災者のライフストーリー—

松本美香子

外国にルーツをもつ住民が、移住地で充足した生を送り、終末を迎えるためには、個人の内的世界を支えることが肝要である。本発表では、被災経験のあるカトリック外国人信徒のライフストーリーから、移住者がどのように日常生活で宗教行為を行い、日本語に意味付けを行っているのかを明らかにする。本調査協力者は、岩手県沿岸部に住む被災経験のあるフィリピン系カトリック信徒ローザ氏（仮名）である。本調査から、彼女にとって日本語は、まず、家庭での抑圧装置であり、ボランティア教師との関りを通して自己表現の手段となり、現在、日本で暮らす外国人と連帯するための支援の道具となっていることが明らかになった。また、来日以来、教会や家庭での祈りを通した神との関わりが彼女を支えていたことが分かった。本発表により、従来の日本語教育の領域で取り扱われなかった移住者の内的世界が明らかになり、内的世界と日本語の関連への理解が深まった。

（早稲田大学大学院）